

図 ⑦

補陀落渡海の基盤と渡海ルートについて

妹尾 匡海

補陀落渡海は、未解明の部分が極めて多く日本の宗教史の上で大きな謎とされている。この補陀落信仰について、成田俊治佛教大学教授は昭和三十三年に『補陀落信仰の性格』^①という論文を発表しておられるが、その中で成田教授は、日本における補陀

落信仰がおよそ三つの発展段階においてとらえられることを指摘しておられる。

すなわち、一、補陀落浄土を説く華嚴経等の輸入以後、補陀落山を一種の他界浄土として、死者の住き住むべき菩薩世界として意識せられていた段階。二、那智山を補陀落山に模し、観音の所住地とし現世的宗教霊地として考えられ信仰されて来た段階。三、こうした那智山を補陀落山と考えると共に、それより更に進んで中国の補陀落山に参詣しようとする意欲、補陀落渡海といわれる信仰形態の発生。

以上が、成田教授の論考される補陀落信仰の発展段階であるが、この説は現在ほぼ定説化されているといつてよいものである。

とくに、第三段階の補陀落渡海信仰は、補陀落信仰を特徴づける最大のものであるが、これは日本古来からの一種の神仙思想、すなわち、海の彼方に実在する一種の仙境に対するあこがれを基盤とする信仰であることを成田教授は指摘しておられる。たとえば、神話として広く知られている浦島太郎の物語や海幸彦山幸彦の伝説は、人間界とは次元を異にした幸福の源泉地としての常世国、海神国でありながら、そうした国へ行けるという可能性、すなわちこれは現世の延長とすることをこうした神話は示しているものであり、日本で独自に展開した補陀落渡海の基盤には、こうした日本人固有の宗教意識が潜在しているということが指摘されるのである。

また、五来重大谷大学名誉教授は、最近、日本の宗教に山岳宗教と海洋宗教の二つの流れの存することを指摘され、観音の補陀落渡海信仰が、日本古代から存在していた海洋宗教の延長上にあることを指摘しておられる。そして、この海洋宗教の基盤はやはり常世思想であったとみておられるのである。

補陀落信仰は、いうまでもなく浄土信仰の一形態である。しかし、こうした様々な説をふまえて補陀落信仰を見ると、それが阿弥陀信仰における浄土信仰とはまったくの対極に立つものであることが知られるのである。すなわち、阿弥陀信仰における浄土は現実世界とはまったく区別されているが、観音の補陀落浄土思想では、その浄土はこの現実世界の延長にあるとみなされ、さらにそれが一種の幸福の源泉とみなされているところに特色があるといえるのであり、ここには観音信仰の特徴である現世利益の思想が色濃く表れていると思われる。

とくに、補陀落が現実世界の延長、海の彼方に実在する浄土と信じられていた事実を示すものとして、たとえば、『吾妻鏡』第二十九の智定房という僧が三十日分の食糧をもって補陀落へむけて出発した話や、『発心集』三の船のかじの使い方を習い一人補陀落にむかった者の話などをあげることができる。

さらに、五来重大谷大学名誉教授の説として、補陀落信仰以前にその基盤となるべき海洋宗教が存在し、さらにこの海洋宗教が常世の思想をその源としていることをあ

げたが、この日本固有の信仰と観音の信仰とが結びついた背景には、やはり『観音経』に示される観音の現世利益的性格と、さらに観音の海洋神祕的性格があったと思われるのである。とくに『観音経』中の

若し大水に漂わされんに、其の名号を称せば、即ち浅き処を得ん。若し百万の衆生ありて、金、銀、瑠璃、砗磲、碼瑙、珊瑚、琥珀、真珠等の宝を求むるを為って大海に入らんに、仮使、黒風、其の船舫を吹きて羅刹鬼の国に飄墮せんも、其の中に若し、乃至一人ありて、観世音菩薩の名を称せば、是の諸人等、皆羅刹の難を解脱することを得ん。

という箇所等は、補陀落渡海を志す者にとって極めて大きな意味をもっていたと推察されるのである。いずれにしても、観音の補陀落浄土は現世に基盤を置く思想であり、来世に基盤を置く阿弥陀の浄土の思想とは対照的なものであった。

ところで、この補陀落渡海が現実にはどのように行なわれたか、興味のひかれる点であるが、紙面の余裕がないので次の機会にゆずることとし、ここでは渡海の拠点となった地を探って、渡海ルートを見ておきたいと思う。

まず、日本における補陀落渡海で有名なのは、和歌山県東牟婁郡那智の勝浦町にある補陀落山寺であるが、ここからは三十人を超える渡海者のあったことが文献上確かめられる。ほかに文献上確かめられるものとして、四国の足摺岬や室戸岬からの渡海の例があり、また、熊本県の玉名市には補陀落渡海碑が現存している。

さて、これらの地点を結んでいくと、その補陀落渡海のルートが浮び上ってくるが、まず那智からみるとその渡海は中国およびインドを目指す（南方浄土の補陀落は具体的には中国、インド方面を指す）のであるから、当然そのルートが能野灘から四国沖を通り、さらに天草灘をよぎり、東シナ海にむかうものであることが知られるであろう。四国の足摺岬や室戸岬についてはいうまでもないが、また、熊本県玉名市の地もこのルートの途中に存在しているのである。また、未確認ではあるが、千葉県館山の鋸山や鎌倉の材木座も補陀落渡海の拠点であった可能性があるという。もしこれが事実とすれば、これも遠州灘を抜けて、さきに述べた海洋ルートに乗るものである。

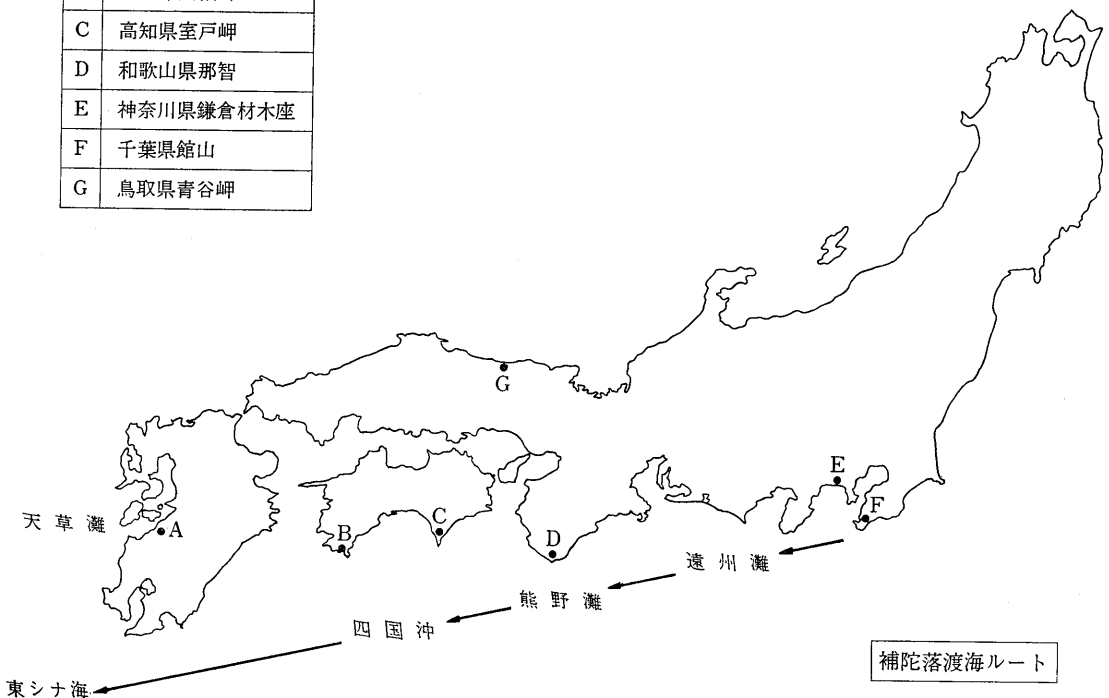
これらの補陀落渡海に係る地を見るとそれらのほとんどが表日本、太平洋沿岸に集中し、裏日本には一、二の例しか存在していないことが認められるが、これらの事実、五来教授の指摘される補陀落渡海信仰とその基盤としての日本固有の海洋宗教ということ考慮に入れて見るとき、極めて興味深いものがあるといわざるを得ないであろう。

註① 成田俊治『補陀落信仰の性格』（仏教論叢六号、八四～八八頁）

② 五来重『死と信仰―補陀落渡海の謎』（中外日報二三一八九号～二三一九一

補陀落渡海遺跡

A	熊本県玉名
B	高知県足摺岬
C	高知県室戸岬
D	和歌山県那智
E	神奈川県鎌倉材木座
F	千葉県館山
G	鳥取県青谷岬



号)

③ 大正九卷五六下。

④ 『熊野年代記』によれば、貞観年代から享保年間までに二十人の渡海者が認められる。

⑤ 足摺岬からの渡海者については、後深草二条「とはずがたり」の巻五に詳しい見聞談があり、また、室戸岬からの渡海者については貞慶「観音講式」奥書に長保二年八月十八日に渡海者のあったことが記されている。

⑥ 熊本県玉名市高瀬、繁根木八幡の稲荷山古墳に立つ補陀落渡海碑には、下野の弘円上人と同行二人の名が記されているという。五来重『能野詣』

⑦ 鳥取県青谷岬には、嘉慶三年の補陀落塔があって、渡海者の氏名は不明であるという。五来重『死と信仰―補陀落渡海の謎』(中外日報三三一九一号)

インターネット公開許諾のない文章には墨塗り処理を施しています。